

余暇活動の関心と実際

——一般老人と病院入院老人の比較——

金城 正治

要 旨 一般老人群と病院入院群（脳血管障害者を中心に）を対象に，余暇行為を中心とした生活行為を「関心がある」・「現在やっている」・「以前やっていた」の3項目をみる調査表を使って調査検討して以下の事が分かった。

- 1) 病院入院群の現在やっている平均種目数は，一般老人群の1/2程度になった。
- 2) 病院入院男性群は，一般老人男性群よりも関心数・活動数・経験数の平均種目数において少なかった。
- 3) 各群とも関心数と活動数，関心数と経験数，関心数と経験数は相関があった。
- 4) 病院入院群の現在やっている行為種目の上位種目は，「テレビをみる・食事をする・風呂にはいる」になった。
- 5) 病院環境は，男女の志向性，文字文化，生活文化を失いやすい環境にあった。

長大医短紀要3：119-123，1989

Key words：余暇調査，老人，脳血管障害

序 論

興味や余暇の調査研究は，調査方法から二つに分類できる。一つは単に興味がある・ない，やっている・やってないの一視点からの調査（一元的）で，二つめにやっているとやりたい，経験があると興味関心がある，関心があったとやっていたの二つの視点からの調査（二元的）である。

これら各次元での調査はともに重要であるが，生活全体の中で余暇を捉える事や過去現在将来にわたって連続的な視点から捉えるには，不十分である。特にリハビリテーションでは，生活の全体性と連続性の視点が大切に

ある。そこでこのような視点からの調査を著者¹⁾は以前に行い，報告した。今回この調査表を用いて一般老人と病院入院老人（脳血管障害者を中心とした）の比較調査を行った。

方法と対象

調査表は，前に紹介した調査表¹⁾を使用した。現在やっているの判断は，最近1年の間やっている種目とした。また以前やっていたは，農林漁業や家事を除き仕事を退職する前とした。なお病院入院老人群は，疾病に罹患する前までとした。

対象（表1）は，一般老年男性群47名（平均年齢65.8±7.7歳），一般老年女性群34名

表1 病院入院群プロフィール

(単位：人)

項目	分類	男性群	女性群
疾患名	脳血管障害	27	16
	その他	3	1
A 移動	歩行可能	15	10
	車椅子	5	7
D 食事	自立	30	15
	半介助	0	2
L トイレ	自立	25	10
	半介助	5	6

(平均年齢 66.6 ± 6.3 歳), 病院入院男性群 30 名 (66.6 ± 7.6 歳・発症からの期間平均 36.1 月・在院期間平均 15.1 月), 病院入院女性群 17 名 (平均年齢 68.5 ± 8.7 歳・発症からの期間平均 36.4 月・在院期間平均 16.3 月) の 4 群とした。

結果

1) 関心数 (関心あると答えた数), 活動数 (現在やっている, 手伝ってもらいながらやっている数), 経験数 (以前やっていたと答えた数) の各群の平均種目数 (表 2) をみる

表 2 平均選択数と標準偏差

(単位：種目)

項目	一般老人		病院入院	
	男性群	女性群	男性群	女性群
関心がある	20.5 ±7.1	20.9 ±6.9	16.5 ±8.1	20.7 ±8.5
現在やっている	17.1 ±5.3	16.6 ±4.0	9.0 ±4.6	8.0 ±4.0
以前やっていた	20.2 ±6.7	20.8 ±6.0	16.0 ±5.3	18.6 ±6.8

と, 病院入院男性群は, 活動数と経験数で一般老年男性群よりも少なく片側検定にて 5% 水準で有意差があった。また関心数では両側検定にて 5% 水準で有意差があった。病院入院女性群は, 活動数で一般老人女性群よりも少なく片側検定にて 5% 水準で有意差があっ

た。関心数と経験数では有意差はなかった。

2) 関心数と活動数, 活動数と経験数, 関心数と経験数の間での各群の相関係数は, 0.30 ~ 0.75 で適度な相関があった。

3) 以上の事柄を具体的な種目内容でみると, 現在やっているの 70% 以上種目 (対象者の 70% 以上がやっていると答えた種目) は, 「テレビをみる・食事をする・風呂にはいる」が各群に共通し, 一般老人男性群で「新聞をるむ」が加わり, 一般老人女性群で「洗濯をする・買物をする・料理をする・掃除をする・新聞をよむ・本をよむ・おしゃべりをする」が加わった。病院入院男性群と女性群は, 上記共通種目だけであった。

4) 関心があり現在やっている, 現在やっており以前もやっていたの 70% 以上種目は現在やっているとはほぼ一致した。

5) 現在やっているの上記の種目を除いた 50% 以上種目 (対象者の 50% 以上がやっていると答えた種目), つまり一般的にいわれる余暇種目をみると, 一般老人男性群で「お酒をのむ・散歩をする・草花をそだてる・宗教をしんじる」、一般老人女性群で「草花をそだてる・音楽をきく・宗教をしんじる・散歩する・温泉に行く」であった。病院入院男性群では低率で特異的な種目はなく, やっている種目そのものも少なかった。病院入院女性群で「手芸をする・音楽をきく」がみられた。

6) 以前やっていた種目の 70% 以上種目をみると, 一般老人男性群と女性群で「テレビをみる・食事をする・風呂にはいる・旅行をする・温泉に行く・掃除をする・買物をする・新聞をよむ・本をよむ・宗教をしんじる・草花をそだてる」が共通し, 一般老人男性群に「お酒をのむ・日曜大工をする・散歩をする」が加わり, 一般老人女性群に「料理をつくる・洗濯をする・裁縫をする・編物をする・おしゃべりをする・音楽をきく・ラジオをきく」が加わる。病院入院男性群は「テレビをみる・食事をする・風呂にはいる」となり, 病院

入院女性群は「テレビをみる・食事をする・風呂にはいる・掃除をする・新聞をよむ・草花をそだてる・裁縫をする・編物をする・手芸をする・散歩をする」がみられた。

7) 以前やっていたが現在やってない種目の40%上位種目をみると、一般老人男性群で「旅行をする・温泉に行く・映画をみる」、一般老人女性群で「編物をする・手芸をする・踊りをする・旅行に行く」、病院入院男性群で「旅行をする・農業をする・お酒をのむ・映画をみる・草花を育てる・本をよむ・新聞をよむ」、病院入院女性群で「料理をする・買い物をする・旅行をする・裁縫をする・掃除をする・洗濯をする・草花を育てる・ラジオをきく・本をよむ・新聞をよむ」がみられた。

8) 以前はやっていなかったが現在やっている種目の30%以上種目は、一般老人男性群で「散歩をする・買い物をする・本をよむ」、一般老人女性群で「体操をする・温泉に行く」、病院入院男性群で「散歩をする」、病院入院女性群で「体操をする・散歩をする・手芸をする」がみられた。

考 察

病院入院群は、活動数（現在やっている種目数）において一般老人群より低い（約1/2）平均種目数を示している。これらは実際に臨床の現場でよく観察されており、大塚ら²⁾も同様な結果を報告している。この要因としては本人自身の要因（疾病者の役割や障害の状態や受容の度合等）と病院環境の要因がある。日常生活行為が全介助であれば能力的に活動数はかなり低下するが、今回の対象者は発症から平均3年、当院入院して平均15ヶ月が経過しており、また日常生活行為（表1）は、移動において約1/3が車椅子を利用し、入浴の一部介助または半介助を除きほぼ自立している。よって日常生活行為の低下ではなく、疾病者としての役割（仕事や家事行為の免除

等）としての低下と障害の受容を含めた生活の志向性（価値感、生き方等）による行為の低下である。また病院そのものは治療の場であるので、余暇に対する場、環境、方法の援助は乏しいのが現状である。よって活動数が限られてくる要因となってくる。

実際にやっている70%以上種目は、日常生活行為や家事行為また普断の生活でよく観察される行為であり、また以前からやっている種目なので、男性老人や女性老人のそれぞれの日常共通行為とみなせる。そのなかで病院入院男性群女性群の70%以上種目はともに「テレビをみる・食事をする・風呂にはいる」となり、男女にそれぞれ特徴的な種目がみられなくなる。山崎³⁾の調査では老齢世代の活動は安楽志向型で、毎日の生活の型を楽しむとあり、この3種目を中心に生活をおくっていると報告をしている。よってこの生活パターンを尊重しながら日常共通行為の獲得と余暇種目とのバランスを考慮した援助が必要である。

それから実際にやっている種目で日常共通行為を除いた50%以上種目（一般に余暇種目となる）をみると、余暇開発センターの余暇活動に関する調査⁴⁾では、60代の余暇活動の上位種目は男性女性とも「国内観光旅行・園芸庭いじり・外食」で、男性が「体操をする」女性が「編物織物手芸」と続いている。本調査と種目内容で少し異なっているが、「旅行」を除きほぼ内容的に含まれるものであった。今回の調査で「旅行」は、以前やっていたが現在はやってない種目の上位に入っている。よって、次項で検討する。また病院入院女性群においては「手芸をする・音楽をきく」だけであった。その中で「手芸をする」はある程度院内環境でも可能であり、作業療法士や看護婦などの職員からの働きかけも多いことも高い要因の一つである。逆に手芸は、以前やっていたが現在はやってない種目の上位にも入っている。よって、やる場所、指導者、仲間の要

素が影響している。病院入院男性群には、とくに共通種目はなく、また一人一人の余暇種目も少ない。これは関心数や経験数においても平均種目数において一般老人群より少なく、罹患以前から余暇種目を含めた生活行為の範囲や経験が少ない傾向があったことを示している。

さらに以前やっていたが現在やってない種目をみると、各群に共通して「旅行をする」がある。これは各群においても関心度や経験度は高いが、旅行そのものは実際に頻度が高いものではなく、また健康や経済的問題や時期や仲間（老人クラブ、地域等）等に左右されやすい。よって実際にやっているやっっていないは半分程度になっている。しかし加齢や健康等により少なくなっているのが現状である。そして身体的に障害や病院入院があると、交通手段等を含めかなり制限がみられ、ほとんどやってないのが現状である。また一般女性群において「手芸をする」は減少する種目であるが、病院入院群では、減少する種目とはなっていない。これは作業療法による働きかけも大きな要因の一つとなっている。それから病院入院男性群では、「お酒をのむ・草花をそだてる・新聞をよむ」等、病院入院女性群では、家事行為と「草花をそだてる・新聞をよむ・ラジオを聞く・本をよむ」等がやられなくなり、文字文化や生活文化を失わせている。

逆に以前やっただけなく現在はじめて種目は、各群ともに「散歩をする・体操をする」等で、自分自身の健康面を意識しての行動である。

次に関心数と活動数と経験数の相関をみると、各群とも関心数と活動数、活動数と経験数、関心数と経験数は適度な相関があり、山田⁵⁾によって紹介されている Matsutsuyu の興味の手針の「興味は効果的な行動をしめす」を裏づけるものであった。全体的に加齢や疾病により生活行為が全体的に縮小するなかで、生活パターンが習慣化している。また余暇開

発センターの調査⁶⁾においても現在の余暇活動は、過去の余暇歴に左右されると報告している。

結 論

生涯レジャー学習⁷⁾においてレジャー能力は年をとってから急に身につくものでなく、若い時代から養っておく必要があると指摘されており、そして生きがいのある老人の共通点の一つに趣味を楽しんでいるとの事を山下⁸⁾多くの研究者が報告している。また余暇活動に関する調査⁹⁾によれば60代男性の43.8%、女性の34.5%が仕事重視派と報告されている。その様な世代価値観や戦争を体験するなかで、余暇やレジャーに対する認識や実践が日常共通行為を含めどの様になされているかは、老後の生活行為に大きく影響をあたえている。当調査においても以前やっていたと現在やっていると関心があるは、適度な関係をもっていることが分かった。そしてその中で病院入院男性群は、疾病以前から生活が単調な傾向があった。よって生活における余暇や生活行為のバランスも健康問題として日頃から十分に認識し、余暇やレジャーに対処する能力を身につけておく必要がある。そして長期入院や施設入所等では、余暇設備、手段方法、仲間や指導者を配置し、治療だけが目的の生活にならないような援助が必要である。

(謝辞：調査にご協力をいただいた皆様に感謝申し上げます。)

引用文献

1. 金城正治, 生活行為の関心と実際の活動, 長大医短紀要 1988 ; 2 : 173-178.
2. 大塚 進他, 在宅脳血管障害者における余暇活動の実態, 作業療法 1987 ; 6 : 126.
3. 山崎一朗, 生涯老人と OT の接点, 作業療法 1984 ; 3 : 4-8.
4. 余暇開発センターレジャー白書 '88, 余

- 暇開発センター，東京，1988. pp9-29.
5. 山田 孝. NPI興味チェックリスト. 理・作・療法 1987; 16: 391-397.
 6. 余暇開発センター. 老人のための余暇フ
ァシリティの調査研究, 余暇開発センタ
ー, 東京, 1974, pp117-119.
 7. 経済企画庁国民生活局. 生涯レジャー学
習, 大蔵省印刷局, 東京, 1987, pp21-
36. 業療法士協会学術誌 1984; 102-103.
 8. 山下照美他. 老人の「生きがい感」につ
いて, 日本公衆衛生雑誌 1987; 34: 569.

(1989年12月28日受理)